

「人権・同和教育で『身につけさせたい力』とは？」

益田教育事務所 学校教育スタッフ指導主事 村上 剛

部落差別解消推進法が施行され2年が経ちました。「部落差別は違法」であることが示され、解消に向かって一歩前進しました。しかしながら、そんな状況でも安心できないのが、ネットの世界にはびこる差別の存在です。

8月16日に益田市人権センターで石西地区人権・同和教育研究集会が行われました。その時の山口県人権啓発センターの川口泰司さんの講演で、私は大きな衝撃を受けました。川口さんは「寝た子はネットで起こされる!？」と題して、ネット上でばらまかされている部落差別等の問題に、当事者であるご自身が、毅然と向き合っ解消に向けて取り組んでおられる状況をお話されました。

その中で、私が衝撃を受けたのは、中学生くらいの少女が街角で拡声器を持ち、在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチをする映像です。少しも悪びれることもなく堂々と、耳にしたくない言葉を連ねていきます！しかも、その周りにはあおり立てる大人たちがたくさんいるのです！

私は2種類の感情で体がふるえました。1つは「悲しみ」からのふるえです。『その子の背景にはいったいどんなことがあるのだろうか？つらいことがあるのかもしれないが、相手を傷つけることを選択してしまうまで、すさんだ心になっている。だれかがその子の気持ちに寄り添うことができなかったのだろうか？』と考えると、とても悲しい気持ちになりました。

もう1つは「怒り」からのふるえです。その子だけの判断でヘイトスピーチをしているとはとても思えません。そこにはヘイトスピーチに向かわせている人の存在があるはずで。そして、それが良識あるはずの大人であると思うと、激しい怒りがこみ上げてきました。

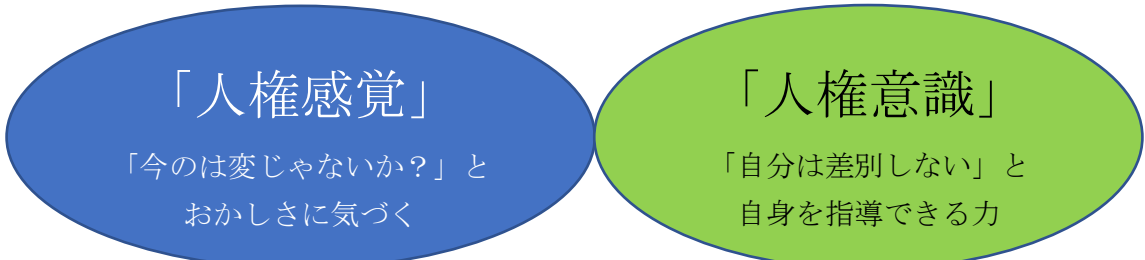
本来なら、その子の気持ちに寄り添っていくべきはずの大人が、あおり立てる側になっている。2つの感情が私の中で複雑に交差し、ほんの数十秒しか見ていないのに心が沈んでしまいました。そして、この映像はネット上にあげられており、今も拡散され続けているのです・・・。

このような事態を改善するためにはどうすればよいのでしょうか。

行政や企業によるネットの対応に限界がある現状では、大人も子どもも関係なく、偏見にとらわれず「正しく知ること」や、どんなときにどんな理由で差別をしてしまうのかという「差別の構造的理解」が必要です。つまり「教育」しかないのです。

では、学校教育で、「正しく知ること」や「差別の構造的理解」を進めるために、子どもたちに何を身につけさせたらよいのでしょうか？

その問いの答えとして、教育庁人権同和教育課の江角和生課長が、指導主事対象の研修会で、下の2つを「つけたい力」として述べられました。子どもたちへの指導のためには、教師の側の「人権感覚」や「人権意識」も研ぎ澄まされていなければなりません。まずは、日々接する子どもや保護者、地域の方との関わりの中に「自分の差別性」がないか、確認してみませんか。



※人権教育指導資料第2集「しまねがめざす人権教育 学校教育編」P3～4も参照してください。

タブレット端末がもたらす新しい学び

益田市教育委員会 派遣指導主事 長島 靖和

益田市では、平成 28 年度より、益田市教育委員会・東京学芸大学・東芝クライアントソリューションによる実証研究事業「タブレット端末を活用した新しい学びによる地方創生プロジェクト」に取り組んでいます。この事業は、タブレット端末の活用により児童・生徒の主体的・対話的で深い学びを実現し、さらに学習記録データによって、授業・家庭学習等を切れ目なくつなげることを目標に取り組んでいます。

事業 3 年目、今年度も引き続き匹見小学校、匹見中学校、新たに桂平小学校での実証研究事業を行っています。

学校訪問で話題となった、タブレットを使った授業で大切にしたいことについて紹介します。

■タブレットありきの授業にならないよう心がける

まずは、授業の目標を達成できる学習が行われ、その上で、それを支えるタブレットを有効に活用できる授業展開を考える。つまり、これまでの授業に、「With ICT」の視点を持った授業づくりをめざす。そのためには、校内でタブレットを使った学びの系統性やタブレットを使った授業で育てたい資質・能力を明確にすることがポイントになる。

■タブレットは考えを伝え合うためのツールとして活用する

子どもたちが画像を使って説明する際、大切な部分を指さしながら説明することで、画像の中の内容に着目させることができる。そして、指をさしながら対話することで、考えていることを引き出し、互いの気づきと学びをつなげることができる。

■タブレット活用と目的に合わせ、教師が考えを促す言葉がけを行う

タブレットを使ったペアや集団での学びでのねらいをもった教師の「言葉がけ」は、子どもたちの「気づき」を誘発し、思考・判断・表現を促し、学習を深めさせることができる。また、授業の振り返りの場面での「言葉がけ」はメタ認知力を伸ばし、学びに向かう力や子どもたちの可能性を伸ばすことにつながる。

これまで益田市では、市内各小学校のパソコン教室に 2 人に 1 台の割合でノート型パソコンを整備してきました。今年度から 2 年間の計画で、使いたい学級がいつでも使える環境をめざし、学級の児童数分のタブレット端末、また、教師にも 2 in 1 タブレット端末*の導入が始まりました。

教師と児童のタブレット端末を使用することで次のような授業展開が可能になります。

- ・作成した教材や画像に、子どもたちの気づき、強調したいことなどをマーキングする。
- ・子どものノートや作品を撮影し、電子黒板で共有したり、タブレットに配布したりして考えを深める。
- ・撮影している映像を遅延再生することで、その場で自身の動きを確認できる。
- ・静止画や動画を、後の活動で利用し、子どもたちの学びをつなげる。
- ・協働的に学ぶ力・論理的に考える力の育成をめざし、教科間や教科内の学習をつなぐ、タブレットを活用した意図的なカリキュラムでの授業が展開できる。

本事業で明らかになった成果を公表し、広くご意見をいただこうと考え、2月15日(金)午後、市民学習センターで「平成 30 年度益田市・東京学芸大学・東芝クライアントソリューションによる実証研究事業 成果発表会」を開催します。本事業の成果をこれからのタブレット端末活用に生かし、子どもたちの主体的・対話的で深い学びにつなげていきたいと考えています。皆様の参加をお待ちしております。

*パソコン1台がタブレット端末としてもノートパソコンとしても使えるパソコンのこと。

キーボードを 360 度回転させ、本体を変形させ、タブレット端末として使用できる。

「学級会」のチカラ

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 佐々木 将光

「先生、お楽しみ会がやりたいです。」「賛成！じゃあ私、学級会に提案するね。」

12月、2学期の締めくくりに近づくと子どもたちから自発的にこのような声が挙がり学級会が盛り上がったのを思い出します。

一体何が子どもたちを熱くさせていたのだろう…と思い出すきっかけとなったのが、津和野町で行った地域における対話の場、「オトナと子どもの学級会」です。「地域総ぐるみによる教育のまちづくり」に向けて、中高生、大人、総勢151人が一堂に会し、それぞれの想いを伝え合ったり聴き合ったりする対話の場です。話していくうちに硬さもほぐれ、笑顔も多く見られるようになりました。その後は、楽しく明るい雰囲気の中にも、熱のある対話によってあっという間に時間が過ぎていきました。世代や立場が異なることで、多様な考え方や価値に触れることができる貴重な機会となりました。参加された方の声です。

【大人より】

- 子どもと関わることで元気になれた。地域のことも考えることができた。
- 久々に中高生と話をし、何を考えているのか聴くことができ、新鮮だった。
- 住民が自分のまちのことを考える当事者になることはすごく素敵なことだと思えた。
- 何かやってみようという気持ちになった。

【中高生より】

- 大人と子どもの境目をなくして話すことがすごく楽しかったし、学ぶことが多かった。
- 大人が何を思っているのか知ることができた。
- 自分に足りないものを見つけることができた。
- 大人と対等に接し、お互いに求め合うことが必要だということがわかった。
- やってみたいことを探してみようと思えた。

参加した大人も中高生も、自己を見つめ直しながら自分にできることはないかという想いを深めていることがわかります。学級会後には、中高生たちに次のような動きが見られるようになりました。

- 地域の行事に積極的に参加する。
- 公民館の運営委員として、中学生としてできることややりたいことを、公民館の職員さんや地域の人に提案し、地域の行事や活動に活かされる。
- 自分達が地域で活動することの大切さに気づき、地域の祭りへの出店を自主的に企画。自分達の取組や地域への想いをチラシにまとめPRする。

こうした中高生たちの動きに、大人たちも負けてはいません。子どもたちに言う前に、まずは大人自身が動こう、変わろうと、今度は「大人とオトナの学級会」を開催することになりました。自分達にもできることはないだろうかと、学級会の企画や運営に携わりたいという人も現れました。参加者から参画者になったことで「よし！やろう！」という当事者意識が高まり、それに伴い、話し合いにも熱がこもってきました。それぞれの想いが異なる中、「こんな会にしたい」という合意形成までのプロセスを共有することでつながりが深まり、さらに熱が高まってきています。想いのつまった学級会によって、さらに自発的・自治的な活動が生まれそうです。

大人も子どもも同じですね。場所は教室ではないかもしれませんが、地域で行われる様々な学級会（対話の場）や様々な集団活動（地域活動、地域と学校との連携・協働の活動）によって、楽しさや成就感、達成感を味わい、やる気が生まれます。そして、同じやる気を持った仲間がいることによって、お互いのことを認め合い、支え合える支持的風土がつけられ、次の課題を見いだし、解決に向けて実践していこうとする自発的、自治的な活動につながっていきます。そしてさらに、「もっとやりたい！」「みんなで話したい！」という熱が加わっていくのだと思います。

「次は〇〇について学級会がしたいです！」という声が聞こえてくるようです。